変わる日本の「暮らし」と「まち」

子供たちの「まち育て」の象徴となる防災観光交流センターが完成

岩手・大船渡市大船渡駅周辺地区土地区画整理事業・津波復興拠点整備事業
（2012年●平成24年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration:Shigeyuki Sakata

柔らかな日差しに春の兆しを感じる3月6日。岩手県のJR大船渡駅前広場に、赤い体育帽子をかぶった24人の小学生が、先生に引率され、浮き浮きした足取りで現れた。この日は、大船渡市立大船渡小学校3年生が1年間取り組んできた「大船渡博士になろう」という授業の一環。新しく生まれ変わりつつあるまちの見学を通し、故郷への理解や愛着を深めようというものだ。

到着したのは、完成間近の大船渡市防災観光交流センターだ。子供たちは、1階の観光交流スペースや2階の和室や授乳室、多目的室、屋上を順番に見学。スタジオでは中と外、2班に分かれて中から大きな声を出し、外で聞こえるかどうかを実験。「本当に聞こえなかった?」「中で跳ねてもひびかないんだね!」と外にいた子に確かめる様子もほほえましい。

見学の合間には、大船渡市や施工者の東急建設と明和土木の担当者によるミニ講義も行われた。

安心・安全に大きくつながる防災観光交流センターの存在は大きい

設計を担当したUR岩手震災復興支援本部の梅本大輔は「すごく愛情をもって、この建物を作ってきました。でも、僕の『まちづくり』のお仕事はここまで。これからの『まち育て』の主役はみなさんです。ここで遊んだり勉強したりして、このまちをもっとイキイキさせてほしい。そしてこのまちをずっと愛してもらいたい」とあいさつ。子供たちからは「高校から大船渡を離れるかもしれないけど、僕たちの力で『まち育て』をずっとやっていけたらいいなと思いました」と感想が述べられた。

その後は外に出て、市の花である椿を植樹。大きなシャベルで力いっぱい土を盛り、4本の椿がセンターと広場に植えられた。

防災と居間の機能を併合

忌まわしい東日本大震災から7年。大船渡市では、山側を安全な住宅地に、海側を商業業務地にする、新たなまちづくりを進めてきた。URは市と協力協定を結び、土地区画整理事業と大船渡駅前を中心とした津波復興拠点整備事業、災害公営住宅の整備に尽力。この防災観光交流センターの整備についても5年前から携わってきた。2016年には全ての災害公営住宅の引き渡しを完了。土地区画整理事業による基盤整備は引き続き行われるが、当センターがURの大船渡市における建物整備の最後の業務となる。

新たなセンターは、津波発生時には逃げ遅れた人々の一時的な避難施設となるよう、外に大階段を設け、東日本大震災級の地震や津波に備えた強度や高さに設定。

いっぽうで、通常時は市民の活動や観光客との交流施設として開放する。

「ここは復興の象徴になるのはもちろんのこと、普段は市民の方々に居間のように使っていただけるよう、色や素材などで温かみや柔らかさを表現しました。大船渡名産のかき殻を使った漆喰や気仙杉など地元の素材も取り入れています」と梅本。

屋外の造園を担当したUR岩手復興住宅工事事務所の押山国男は「人のつながりの中心になるよう、外のベンチやアプローチなどは、丸やだ円をモチーフにデザインしました。暖かくなったら、外のベンチで皆が輪になってお弁当でも広げてくれたら」と話す。屋外の設計を担当したUR岩手震災復興支援本部の山本洋之（ひろゆき）も「大船渡駅前というまちの中心エリアで建設される最後の建物なので、周辺にある駅や商業施設などと溶け込み、まちとしての一体感を出せるように配慮しました。ここまでこられて、いまはホッとしています」と笑顔を見せる。

大船渡市災害復興局　大船渡駅周辺整備室主任の佐藤仁さんは「センターの設計・整備にあたっては、現在求められる役割や機能を果たすだけではなく、利用者の活動が徐々に育まれていくなかで、その使い方も変化していくものと考え、建物内部はオープンな空間構成としたほか、できるだけ移動可能なもので構成するなど、URさんと検討を重ねながら進めてきました。今日の見学と植樹を通じて、子供たちが『利用してみたい』と感じてくれたとしたら、とてもうれしいです」と話す。

故郷を知り、愛する大人に

センターの見学を終えた子供たちは、近くに建設中の椿茶工場やワイン醸造所を見学。

「柱に大船渡の木を使っていて、そういうところでも大船渡を見せているんだなと思いました」（川原絵理奈ちゃん）

「センターが完成したら、2階にある机がある部屋で勉強してみたい」（木下龍葵（りゅうき）くん）

「大人になったら、皆さんみたいに、大船渡のまちをつくる仕事をしたい」（関原ななみちゃん）

など、感想を発表した。

「この学習での一番の願いは、故郷を知って、故郷を愛する大人になってほしいということです。いずれこのまちを出ていっても、心の中に帰る場所、自慢できる故郷があれば、どこに行っても生きていける。自分をいつでも見つめていてくれる故郷があることを心に持つ大人になってほしい」と担任の薄衣（うすぎ）浩子教諭。新しく蘇る故郷に誕生するセンターと広場で、元気な子供たちの声が聞こえる日が待ち遠しい。

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社